

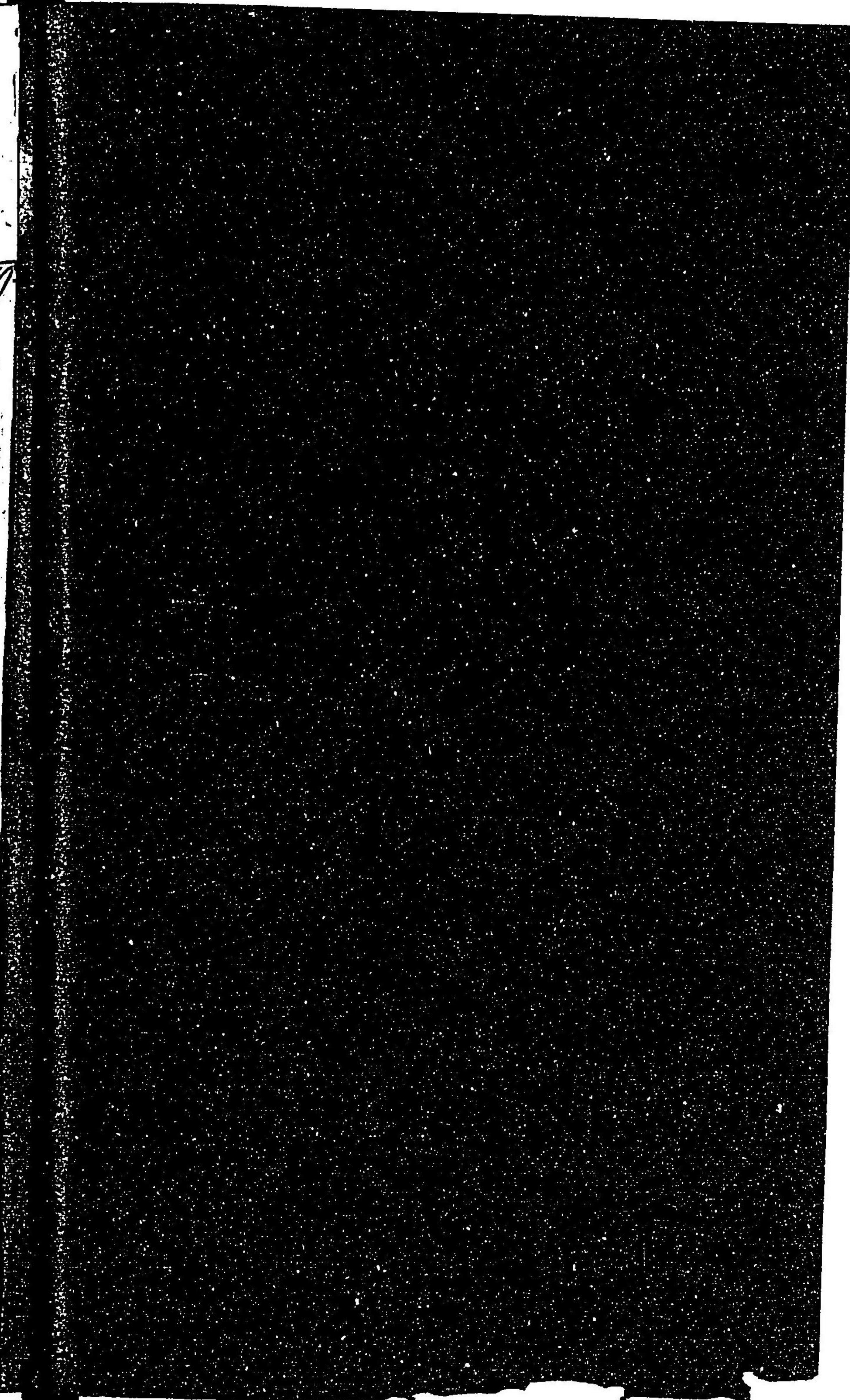


19-403

No 799/2507



明治廿四年撮影



教育宗教關係論

井上圓了講述

論

頃者教育部内に於て敎語と耶蘇敎との間に一二の衝突を來し議論諸  
 方に興り紛々々々底止する所を知らず然れども此衝突や單に教育部  
 内に止まらず今にして其豫防策を講ずるにあらざれば將來必ず社會  
 百般の上にあつて此二者の衝突を來すべきは燎然として火を見るか如  
 く是れ教育宗教の分離混同の點についても多少世論のある所にして教  
 育全躰と宗教全躰との關係については同く將來の一問題なりと信す  
 れば余は此に學理上教育と宗教との性質及び其關係を明示し實際上

亦其關係如何を論定せんとす是れ余は目下の一大急務なりと考ふるなり殊に本館は教育宗教を授くるを以て目的とする學校なれば世間既に此衝突について議論紛々たる以上は本館にありて在學するものは豫め其決心を定め置かざるべからず是れ余が茲に此問題を掲げ來りて講述せんと欲する所以なり且つ余は教育宗教の問題に關しては多年聊か考究する所ありて其結果遂に先年本館を創立するに至れり故に余は此關係を論する前に本論に入るの端緒として余の經歷上精神目的のある所を陳述すべし

太政維新以來我邦傳來の佛教は全く世人の排棄する所となり日に月に衰頹の光景を現呈し其存亡亦將に旦夕に逼らんとする有様なりき是に於て余は慷慨に堪へず奮然立て此衰運を挽回せんことを自ら期せり而して此頹勢を恢復せんとするには先づ其衰頹せる原因の果し

て那邊に在るかを探究せざるべからず故に余は之を探究して其原因は内外二部より生したることを發見せり内部の原因とは何ぞや曰く維新以來政治上より衣食住に至るまで皆舊を捨て新を取り一事として變更せざるはなく一物として進遷せざるはなし然るに顧みて佛教其者の状態を觀察するに維新の激變に遭ふも僧家の頑眠未だ覺めず世運の趨勢如何を知らずして依然舊習を株守し更に進て力を佛教の擴張に盡くす者なし是に於て乎佛教の内外其權衡を失し平均を保つこと能はず勢ひ斯の如くなるときは佛教其者は必ず衰頹せざるを得ず更に之を歴史上より觀察せん乎其今日衰微の原因既に數百年前より早く佛教の内部に胚胎し來りしことを知るべし

余は佛教の始て我國に傳來せしより今日に至るまで千數百年間の歴史を分ち五世期とす蓋し此の如く分つ所以は其一世期毎に佛教上に

一大變遷ありしを以てなり

第一世期(支那佛教の時代)聖徳太子の時より桓武天皇以前に至る  
第二世期(日本佛教理論發達の時代)桓武天皇御宇より源平以前に至る

第三世期(同實際發達の時代)源平時代より徳川以前に至る

第四世期(外形發達の時代)徳川時代より維新以前に至る

第五世期(未定時代)維新以來

佛教の始めて我邦に傳はりしは聖徳太子以前にありと雖も其公許を得たるは正しく聖徳太子の時にあり故に聖徳太子以後桓武天皇以前までを第一世期とす此世期は佛教漸く隆盛なりしと雖も其當時の事情を視るに之を日本佛教と曰はんよりは寧ろ支那佛教と名くるを以て適當なりとす抑も當時我邦は支那と交通來往すると頻繁にして文物

多く彼に模擬し百事皆彼を標準と立てたる勢なりしを以て佛教も亦支那の佛教を其儘傳へたるのみ故に其佛教たるや未だ真正に我國情に同化したるものと謂ふ可らず故に余は此世期を支那佛教の時代と名く然るに桓武天皇以後は全く日本佛教の時代にして此世期には空前絶後の高僧傳教弘法の二大師世に顯はれ傳教大師は皇城鎮護の爲めに叡山を開き且つ竊かに政治に參與して大に國家の爲めに畫策する所あり弘法大師は本地垂迹の説を起し以て我邦の神佛二道をして並行一致せしめんとを企てり且つ當時の政府の意も全く佛教を以て天下を治めんとするにありたれば此時より佛教始めて國家的宗教即ち日本の國體に結合したる一の宗教となれり故に余は桓武天皇以後今日に至るまでを日本佛教の時代と稱す而して此第二世期即ち桓武天皇以後源平以前の間は天下泰平無事にして佛教亦甚た隆昌を極む

故に當時の僧侶は廣く典籍に涉り深く學理を研き俗士と雖も亦佛教を學ぶもの頗る多かりき當時の文學の全く佛教の支配を受けたる一例を見ても佛教の勢力如何を想像するに足らん然るに源平時代に至りては天下の形勢一變して政治上宗教上共に一大革命を見るに至れり而して其政治上に革命を起せるは源平以前に於て藤原氏獨り政權を掌握し門閥政治の極端に奔りし反動なり蓋し當時にありて源平二氏は國家に勳功あり又勢力ありしも久く門閥政治の下に屈伏せしか藤原氏の漸く衰ふるに乘し一時に奮起して其權力を奪ひ自ら取りて之に代はれり是れより後天下麻の如く亂れ争鬪絶ゆることなき亂世となれり社會既に斯の如き變動あれば宗教上にも亦必ず變動を生ぜざるべからず彼の藤原氏極盛の時代に於ては會々英傑の出つるあるも身門閥の家に生るゝにあらざれば以て功業を立て伎倆を顯はすと

能はず是を以て英雄空く深山幽谷に籠居し靜に高妙の學理を究め以て其精神を慰むることを務めり殊に當時の宗旨は華嚴天台眞言法等にして皆高妙の理論を唱ふるものなれば佛門に入る者は許多の年月を積重して其知力思想を鍛練せざるべからず且つ其戒律は極めて嚴肅なるものなれば學問上よりするも實行上よりするも到底普通人の爲し得へきとにあらざ故に此等の宗旨は泰平の時代に適するも亂世に弘まるへきものにあらす争亂多事の社會に應合するものは修行も學問も容易に爲し得らるべきものならざるへからず是れ源平時代に於て宗教上亦一大革命の起りたる所以なり此に由て考ふるに源平以前の宗旨は重に理論を主とし實行を客とし源平以後の宗旨は實際を先とし理論を後にしたるか如く見ゆるは共に其當時の社會の事情に適合したるや明かなり故に余は源平以前の佛教を理論上發達の時

代とし源平以後の佛教を實際上發達の時代とす此源平時代に於て新に興りたる宗旨は即ち淨土宗、禪宗、眞宗、日蓮宗なり淨土宗は學問戒律の修行を要せず只念佛に依りて成佛することを説く即ち實際上の宗旨なり眞宗も此宗より分派したるものなれば矢張念佛宗なり日蓮宗は天台宗の高尙なる理論は實際上亂世多事の世界に適せざるを見て之を一變して簡易なる宗旨となし題目成佛を唱へり其理論は高尙なる天台に本くと雖も其應用に至ては淨土宗の如く簡易の宗旨なり禪宗は是亦實際を目的とする宗旨にして此宗は他より一見せば甚た高尙なるか如く思はるゝも其實理論の高尙なるにあらずして趣向の高尙なるのみ又源平以前の宗旨は多く經論の講究をなす風ありしか此宗は之に反對して經文は唯是れ月を指示する指に過ぎずとして文字に拘泥するの弊を排斥し其戒律の如きも天台眞言等に比すれば甚た

簡略なるものとなれり斯の如く源平時代に於て一時に高僧碩徳輩出し各一宗を開きしは蓋し其以前の宗旨の多事なる亂世に適せざるか爲に之に應合せしめんとしたるを以てなり且つ源平以前の宗旨は概ね世間を遠離せんとする傾向ありしか此時代に興りたる宗旨は各々世間に結合せんとする風あり是れ他なし前者にありては社會の事情人心を抑制するの甚き人をして其希望を満足せしめざるか爲に之を他の方向に轉し専ら出世間を以て其目的としたるを以てなり然るに後者にありては世間に向ふて其望を満たすを得る時代なれば出世間を目的とする宗旨も兼ねて世間を目的とするに至る故に眞宗の如きは寺院を繁華の地に建て眞俗二諦の教を説き王法爲本を主張せり日蓮宗の如きは此世界即ち極樂なりとの説を唱へ以て世間の外に淨土を願ふの誤れるを示し祖師自から安國論を草して佛法を盛ならし

めんには先づ國家を盛ならしめざる可らずと云へり是亦世間に結合するものなり蓋し浄土宗、真宗は西方に別に極樂あるを説き天堂は死後の世界なるとを唱へたれば日蓮宗は之に反對し此土即ち極樂なり此身即ち佛なり何ぞ死後を待つゝの要あらんと云ひて専ら現世を目的とせり然り而して浄土日蓮宗の念佛題目を主とする如き易は則ち易なりと雖も多少知識を有するものより之を觀れば易に過ぐるか如き感なきにあらず故を以て戰國にありて英雄を以て自ら任する武人には猶ほ不足を感ずるとなきを得ず然るに禪宗は以心傳心見性成佛を唱へ高尙の趣向を説きて以て亂世武人の思想に適合せしめたり是亦一の反動によりて起れりと謂はざるへからず次に第四世期徳川時代に於ては其源平以前の宗旨と以後の宗旨とを問はず幕府より總て之を保護優待せり蓋し織田信長の如き英雄にして宗教を壓倒せんことを

企てしも到底之に勝つこと能はざりしを以て徳川氏は此等の經驗に鑑み以て國家の治平を保たんとせば必ず宗教に依らざるへからざること覺りしなるべし然れども單に宗旨のみに倚賴するときは宗旨の爲に却て國家を奪はれんことを恐れ從來混淆せる儒佛二道を分ち儒を以て佛の反對に立たしめ世間の道德は儒教の掌る所死後の葬祭は佛教の支配する者とせり其結果たる儒は中等以上に行はれ佛は多く中等以下の信する所となれり故に此時代に於ては表面は佛教甚だ隆昌を極めしか如くなるも其實理論實際共に其精神既に過ぎ去りて只其形式發達の時代となれり是れ其優待の過ぎたるが爲に外形上の儀式裝飾の一方に進み其内部の精神は漸く腐敗するに至りしなり且つ徳川氏は耶蘇教の侵入を恐れしを以て特に佛教に保護を與へたり而して此弊や徳川の季世に至るに及ひて層一層極端に傾き佛教は唯

儀式的裝飾的のものとなり僧侶は遊惰に流れ无學に沈み位階を争ひ坐席を競ひ年臘を以て階級を定め甚しきに至ては金錢を以て僧位を鬻賣するに至れり然れども當時の僧侶は尙ほ佛教の精神業已に去りて形骸のみ存するものなるを知らず鼓腹擊壤以て天下泰平佛教繁昌を謠歌しつゝありき之を要するに源平時代の前後に在りては佛教内部の精神或は理論上に發し或は實際上に發したりしか徳川時代に至りては外部の優待甚しかりし爲め内部の精神は轉して外部に移り單に儀式上の一點に於てのみ古來比類なき隆盛を極めたりき然るに一朝王政一新の大革命あるに會し僧家は愕然として之に處するの方を知らず且つ此革命や不幸にも三百年間徳川氏か與へたる外部の優待を一時に剝奪せしを以て茲に佛教は無精神無形式の有様となれり之に加ふるに世運變々として日に月に進歩するも佛教家は頑眠未だ醒

めず尙ほ改進の途に就くを知らず嗚呼佛教明治初年の事情此の如し衰へさらんと欲するも豈に得へけんや是れ余か佛教衰頹の原因は内部にありと云ふ所以なり

次に外部の原因とは維新以來泰西諸邦との交通漸く開け種々の文物我邦に輸入するに従て種々の學術宗教之れと同時に侵入したるにあり而して佛教は此等學術宗教の刺戟に由りて益衰微の機運に傾けり其學術とは即ち理化等の諸學にして此學は専ら實驗に基つきて組織したるものなり而して此實驗的學術の一たひ我邦に行はるゝや佛教の説大に此等の學説と矛盾乖反する所あり是に於て世人は理化學實驗説を眞理なりと認むると同時に佛教は三千年以前の想像説と斷定し之を妄談空言として排斥せり即ち夫の佛教の須彌説の如きは彼等の攻撃する一要點なりき且つ彼等は僅に佛教中の一點にして學理に



反するあれば直に佛教全體を擧げて之を排斥せり而して佛教家中に一人として學理上より之に答ふるものあらず是其衰頹せざるを得ざる一原因なり又次に其原因たるものは耶蘇教の我邦に侵入したることと是なり我邦泰西諸國と交通を始めしより万般の事上下共に西洋開化の風に心酔し一時は之を模倣するを以て一般の主義とせり而して其餘響宗教社會にまで波及し我邦の宗教は未開の宗教なり西洋の宗教は開明の宗教なりと誤解し耶蘇教を信する者日に月に増加し爲に佛教は大に其勢力を削減せられ社會の中流以上にある者は佛教を顧みる者なく唯僅に愚夫愚婦の之を信するあるのみ是に於て乎千有餘年我邦の民心を支配し來りし佛教も今や數十年を出てすして撲滅せんとするの悲境に沈淪せり

斯の如く佛教は内部より腐敗を生し外部より攻撃を受け遂に衰頹せ

ざるを得ざる場合となりしが余は深く之を遺憾とし微力ながら此衰運を挽回せんとを思ひ佛教をして再び隆昌ならしめんとするには如何なる手段を以てせば可なるべきかを考究し卒に佛教興復は實際上と理論上との二方によらざる可らざるを發見せり而して余は實際上の方法は暫く之を措き先づ理論上より改良を施さんとを企てたり

余は學理の上より佛教を中等以上の學者社會に説くべき價值あることを示さんとするには如何なる學を研究せば果して適當なるかを考察せしに今日佛教の衰廢は一方に於ては理化學の流行其一原因たるを以て理化學に對して宗教の眞理を開示するには必ず哲學に依らざるべからず又一方には耶蘇教の侵入其一原因たるを以て耶蘇教を排して佛教を振起するには亦哲學に依らざるべからざることを發見せり即ち當時余の考ふる所を記すれば左の如し

學理上より耶蘇教を排斥するものは哲學なり  
理學に對して宗教を保護するものは哲學なり

と故に余は理論上より佛教を振興せしむるには唯一の哲學を研究するに在ることを信し大學に入るに方りて自ら哲學科を擇ひて之を専修したり

而して余が研究中尙ほ一事の余が心中に浮び出てたることあり即ち佛教の盛衰は國家の消長に關係すと云ふことは是なり何故に今日耶蘇教の世界中に勢力を逞うし佛教の此邦に萎靡して振はざるかと云ふに是れ畢竟西洋諸國の富強にして我邦の之に比して貧弱なるが爲めのみ若し我邦にして西洋諸國よりも富且つ強ならしめば我邦の宗旨も亦必ず世界万国の上に盛んなるや疑なし果して然らば佛教を盛にせんと欲せば先づ此國を盛ならしめざるべからず斯の如く余は一方

にありて國家を保護するの必要を感ずると同時に他方に向ては學問上に眞理を愛求するを以て目的とせざるべからざるを感せり即ち學者としては眞理を愛し國民としては國家を護らざるべからず此護國愛理の二大義務は吾人の最大目的なるを唱へり抑も人たるものは身心即ち肉體と精神より成れるものにして肉體は吾人一個の成立を有するが爲に親子兄弟を生し眷屬の關係是より起り精神は知識思想を有するを以て學問の研究是より生ず眷屬は數多相集合して國家を形成し學問は研究を重ねて眞理を發見し得へし國家は實際上にして眞理は理論上なり而して實際上の性質は差別にして理論上の性質は平等なり今之を概括すれば左の如し

人  
身——眷屬——國家——實際——差別  
心——學問——眞理——理論——平等

是に於て苟も人間たるものは身に護國の義務を擔ひ心に愛理の念を抱かざるへからざるを知るへし此の如く身心の二者各其司る所異なりと雖も其實互に密接の關係を有するものなり何となれば身心共に吾人の身軀中に具はるものにして只表裏内外の差あるのみ此二者決して相分離すべからず學問國家亦偏廢すべからず平等差別又決して偏倚すへからず若し其一を取りて他を廢すれば必ず一方に僻する偏見に陥るべし然れども時と場合とにより護國を先にして愛理を後にすることあり愛理を先に置きて護國を次にすることあり恰も歩行の際或は右を先にし或は左を先にするとあるか如し今此關係を佛教上に適用するに宗教の隆替は國家の盛衰に伴ふものなれば我國家の爲には佛教を改良して其隆昌を期せざるべからず又真理の爲には佛教中に包含する妙理を世上に宣布するを目的とせざるへからず是れ

皆に佛教家の責任たるのみならず苟も日本國民たるものは悉く負擔すへき義務なりと謂ふべし

以上は余か經歷上宗教に就ての考を述べたるものなるが余は初に於ては單に佛教恢復の一念を有し哲學專修も此目的より起りしが大學在學中其考一變して人生の目的は護國愛理の二大義務を盡すにあるを覺り其後佛教活論序論を著述せるは全く此意に本つけり此の如く余の考は哲學研究の前後に於て多少異なる所ありと雖も是れ只其區域の廣狹のみ佛教を振起する精神に至ては前後一貫して終始相渝ることなし以上は余の佛教に對する感情の一端を述べたるのみ以下余か教育の必要を感じるに至りし次第を叙述せん  
佛教を再興せんとするにも佛教家其人にして知識と道德とを兼ね備ふるとなければ到底其目的を達すると能はず人能く道を弘む道の人

を弘るにあらすと云へる如く宗教は人を待ちて始めて盛なるものなれば佛教を再興せんには先づ佛教家を養成せざるべからず是れ佛教内部に教育の必要なる所以なり又假令佛教家の智識のみ進歩するも社會一般の人智進歩せざる時は佛教をして盛昌ならしむるを得ず何となれば一般の人智の程度低きときは外部より刺戟を與ふることなきを以て宗教家は自ら其位地に甘んじ改良進歩の念起るとなし是れ國民教育の一般に必要な所以なり而して若し國民教育の進歩によりて一般の人智大に發達し佛教家の智識の程度尙ほ之より低きにあるときは何人と雖も此の如きものを宗教家として奉戴するとなかるべし故に苟も宗教家たるものは社會と共に進歩し尙ほ幾分か社會一般の人智の程度より高位に居らざるべからず余又西洋諸國に耶蘇教の盛なる所以を探究したるに其原因亦實に茲にあるを知る西洋の

宗教家たるものは多少一般の人民を教導するに足るべき學力を備へ且つ其社會の智識の程度も一般に進歩するを以て若し宗教家にして不徳の所行を爲すものあれば世人は之を宗教家として待遇するを許さず爲めに其人は宗教部内に生活するを得ず故に宗教家たるものは社會の制裁力の強きか爲に自然其徳行を修め智識を磨かざるを得ざるに至る是れ西洋の宗教の今日尙ほ勢力ある一原因なり此に由りて之を觀れば今日我邦に於ては一に佛教家の教育、二に國民の教育を奨勵するとは目下の一大急務なりと謂ふべし

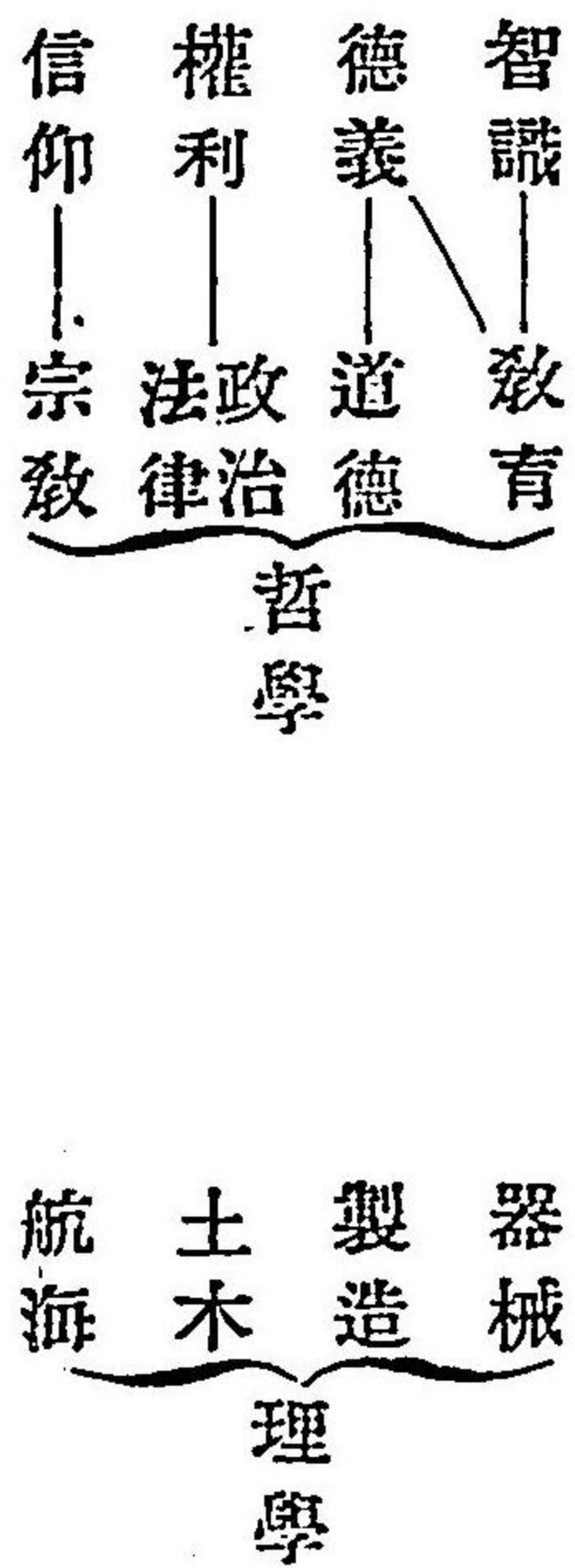
凡そ吾人は國民として護國の義務を擔ふものなれば此點より考ふるも教育を盛にするは吾人の責任たるや論を俟たず今日我邦にして西洋諸國と對等の交際を爲し對等の條約を締結せんとするには先づ國民の位地を高め彼と同等の資格を有たしめざるべからず而して國民

の位地を高めんとするには必ず教育に依らざるを得ず熟く我國の形勢を觀察するに我邦維新の際にありては之を西洋諸國に比するに万般の事一として彼に勝るものなく器械工藝等の有形的文明より政治教育等の無形的文明に至る迄遙に彼の下に位するを以て吾國民は全力を盡して泰西諸國と肩を比へ文明國の列に加はらんことを企たたり此時に當りて我國民の最初に着目せしは泰西の有形的器械上の文明にして一時は全國擧て之に心酔し百事其風を模擬せんと欲し工藝器械等皆彼より輸入し茲に廿五年間孜々として開國の事業に力を盡くし今日に於ては殆ど西洋各國と同等の位地にまで進歩するに至れり然れども其實力如何を顧て我邦因果して西洋と同等の交際を爲し得るや否やを考ふるに未だ俄に首肯するを得ず尙遙に我邦の彼に比して劣る所あるを見る是れ他なし蓋し吾人の今日に至るまで駸々

として進み來りし者は只有形の文明のみ外見の文明のみ然るに西洋諸國は數百年の久しき間有形無形並行並進し殊に無形の智識思想の文明先づ發達して其枝に有形の文明の花を現出したるものなれば到底我國の比較にあらず然らば我國は今後無形の文明を進めて西洋と同等の位地に到らしめざるべからず

無形の文明とは何そや凡此世界萬有を大別するときは物と心との二者に出てす物に關するものは有形にして心に關するものは無形なり有形とは器械製造土木航海等を云ひ無形とは智識德義權利及び信仰の四を云ふ此四は皆吾人の心の上にある性質並に作用にして此四を講究する者は教育道德政法及び宗教なり即ち人の智識を開發するは教育にして德義を養成するは道德なり若し教育を其廣き意味にて解すれば道德も其中に入るへし而して人間相互の權利を全うせしむる

ものは政治法律にして信仰を定むるものは宗教なり此四は共に無形を目的とするものなれば所謂無形上の文明とは此四の並進して發達するを云ふなり或は人情を純良にし或は風俗を高尙にし或は勉強力を養成し或は愛國心を奮起せしめ或は團結心を鞏固ならしむる等總て此四の力に依らざるはなし而して此四を學問として研究するときには哲學に屬す故に哲學は無形の學なり之に反して器械製造土木航海等の有形に屬する者を研究するは理學なり故に理學は有形の學なり今之を圖に示さは左の如し



我邦は維新以來有形の文明大に進歩したりと雖ども無形の文明は未だ左程に發達せざるなり然れども此無形中政治法律は多少進歩したるを見る蓋し政治法律は他の三者と共に無形に屬すと雖も又自ら種類の異なるものなり教育の如きは其方法は假令外部より注入するも其目的は内部の心意開發にあり然るに權利なるものはもと各人相互の間に成立するものなれば之を保護する政治法律は全く外部より強行的手段を用ひて當嵌むるなり故に政治法律は無形中の外部に屬し教育道德宗教の三は無形中の内部に屬するものなり今日我邦に於ては外部は進歩せしむる内部は未だ進歩せず形は既に整ひしも實は未だ備はらず然らば今後吾人の益々盛ならしめんとする者は教育道德及び宗教なり然れども此中道德は教育と宗教との關係するものなるが故に別に道德の一目を擧ぐるを要せずされば我邦現今の最大急務

とする所は實に教育と宗教との二者を振起するにありと知るべし然るに爰に一問題あり曰く我國教育の法は泰西文明國の既に完成せる者を輸入して之を實施したる者にして今や如何なる山間僻陬と雖も校舎の設けあらざるはなく如何なる貧民の子弟と雖も普通教育を受けざるはなし是れ豈に教育の進歩にあらずして何ぞやと夫れ然り然りと雖も是れ尙ほ教育の完成と云ふを得ず何となれば我邦教育の進歩は其建築の壯麗なる器械の整備せる試験法の嚴重なる學科の高尙なる其他管理法、教授術等の外部に屬する者のみにして教育の精神たる心意の開發と云ふ點に至ては未だ果して其實功を奏したりと云ふを得ざればなり加之、從來の教育たる其缺點亦甚しとせず例せば一般の教育濫に外部の競争に止まりて内部の實を顧みることなく又智育一方の教育に偏し道德實行之に伴ふとなし又教育敎語の下賜せら

るゝに至る迄は教育の方針は多く之を外國に取り人倫道德の教と雖も其標準を西洋各國に取りて修身科に適用し來れり又一個人主義の教育法に據りて未だ國民たる資格を與ふるとを知らざりき頃者文部省教育令の發布ありて漸く國民的教育の方針一定するに至れり之を要するに從來の我國の教育は洋風の模倣にして未だ我國に適當せる教育と謂ふべからず故に今日より更に改良を加へて完全真正なる教育を振起せざるべからず

教育と宗教とは之を理論上より講究するときは共に哲學に屬するものにして之を實際上より觀察すれば何れも國家に關するものなり抑も教育の目的は一個人の心意を開發して完全なる人物を作るにあり而して其人にして完全なるときは之に由りて組織せらるゝ國家も亦完全なるべし故に教育は完全なる一個人を作り以て國家を益するも

のなり而して宗教の目的は只一個人の精神を安定するのみならず人々の間に精神と精神とを結合し所謂精神的團體を結成するものなり何となれば宗教は何れも一種不可知の躰を立て之れに向て衆人の精神を一結するものなればなり但し宗旨に由りて躰を客觀上に立つるもの(淨土宗眞宗等の如く)と主觀上に立つるもの(禪宗の如し)との相異あり然れども不可知の躰に向て各自の心を結合するに至りては二者同一にして前者は客觀上に一致せしめ後者は主觀上に一致せしむるものなり故に宗教は人心を一結するに大に其の功ありと知るべし

以上論ずる所によりて之を視れば余か護國愛理の二大目的を達するには此教育と宗教とを興起するより適切急要なるはなし即ち國家より云へば教育を振起せざる可らず眞理より云へば佛教を再興せざる

へからず然れども教育も之を學問上より研究するには眞理と關係し宗教も之を實際上に應用するには國家と關係するを以て圖の如く相互密着の關係を有するものなり故に教育宗教を振興すれば之れと同時に護國愛理の二大義務を完成するを得べし



余や微力を搦らす自ら進て此二大目的を遂ぐるを以て畢生の本務とし終始一貫毫も渝る所なし夫れ余か始めて大學に在るや常に自ら新聞雜誌に書を投し以て余か目的の一部分を達せんとし教育上には普及舎の當時初めて我邦に通信教授を開設するに際し之に加はりて其一部を擔任し以て普通教育の普及を計り又宗教上には明教新誌の寄書家に加はりて論説を草し聊か各宗僧侶に對して佛教の再興を促せ



り而して大學を出てし後は専ら著述に従事し教育上には心理倫理等の書を編述し宗教上には學理上佛教ノ講究に力を盡くせり是れ皆余か二大目的より出てし者なり

然るに其後余か此目的を實際上に應用せんとするには先づ學校を設立するの必要を感じたるを以て曩きに哲學館を創立し實地に教育を施行するに至れり而して哲學館の目的とする所は文科大學の速成を期し廣く文學史學哲學を教授するにあるも就中教育家、宗教家の二者を養成するにありて其方針とする所は教育の方は日本主義を取り宗教の方は佛教主義を取るとなせり余か教育上日本主義を取る所以は我國は既に堂々たる獨立國にして泰西諸邦の屬國にあらず吾人は日本の國民にして歐米諸邦の臣民にあらず吾人既に日本國民たる以上は此國を維持せざるへからず此國を維持せんとするには日本固有

の精神を保存せざるへからず故に余は當時我邦の諸高等學校の西洋主義を取れるに反對して日本主義を取り教授上に日本語を用ふるは申迄もなく教師も決して西洋人を用ひさると定めり然れども方今は敎語一たひ下りて教育の方針一定するに至りしを以て殊更に日本主義を唱ふるの必要なし又宗教上佛教主義を取る所以は余か佛教活論序論に詳述せるか如く佛教は實際上我國固有の宗教となり一千有餘年の間人心を支配し來りし者なれば若し佛教にして野蠻非理取るに足らず之を今日に傳ふべからざるにあらざる以上は日本國民たるもの之を信奉せざるへからざる義務を有するものなり况んや學理上佛教は眞理として講すへきものあるに於ておや是れ余か佛教主義を取る所以なり

既に哲學館を創立して以來余自ら歐米各國の教學の實況を觀察せん

と欲し遠く泰西に遊ひ年を越えて返朝し更に大に感ずる所ありて哲學館を改良し日本大學を開設せんとを計畫せり是亦余か護國愛理の二大義務に關係する者にして教育と宗教との本原に遡りて其主義を明にせんと欲せば其國固有の學を專修する路を開き以て學問上根據を確定せざるへからず我國固有の學は國學漢學佛學にして日本大學の目的は此三學の専門科を設くるにあり之を要するに余の教學に關する事業は大小種々あれども總て護國愛理の二大目的を實行するに外ならざるなり

以上は余か凡そ十年間の經歷の大要なり然れども其間余か志向多少變遷する所なきにあらず初には宗教一方を取り次には教育宗教を併せ取り前には佛教のみを再興せんと欲し後には國家と佛教と共に隆盛ならしめんとを望めり然れども余か大體の目的精神に至りては毫

も變ずる所なく只其見識に前後廣狹の差あるのみ換言すれば目的の變更にあらずして發達なり然るに世間或は余の目的變更を疑ひ前には佛教の保護者として熱心にして今は大に冷淡なりと云ふものありと雖も是れ蓋し社會の五六年前と今日と大に變遷する所あるを知らざるに由るのみ抑も近年佛教の形勢大に一變し七八年前に於ては佛教將に廢滅せんとするの有様なりしも其後世人は宗教の必要を感じ自然に外國の宗教を用ふるより寧ろ我國固有の佛教を取るに若かざるを知るに至れり天下の形勢既に一變するに於ては世人の余の事業を見るも亦必ず變ずる所あるを感すへし然るに世態の斯の如く變遷したるを覺えずして余の事業を評するは恰も船に乗る人已れの動くを知らずして對岸の奔るを見るか如し何ぞ見るとの偏するや

七八年以前衰頹の極度に達せし佛教の何故に今日其勢力を挽回する

に至りしか其原因に二あり一は哲學の流行、一は日本主義の流行なり  
哲學の流行は學問上にして日本主義の流行は實際上なり先づ哲學の  
流行か其一原因たるは第一に帝國大學にて印度哲學の名稱を以て佛  
教を其學科に加へられしより佛教は大に世人の注目する所となれり  
第二に近來佛教の研究泰西諸國に盛なりしを以て亦我邦の學者の佛  
教講究に心を傾けたるによる次に日本主義の流行の佛教再興を助く  
るに至りしは我國維新以來一時の間は上下共に歐化主義に傾きしも  
天下の形勢は一變して他國を崇拜するときは國家の精神を失ひ其結  
果大に憂ふべきものあるを悟りしによるなり畢竟近來耶蘇教の行は  
れたるは耶蘇教は西洋文明國に行はるゝ宗教なるを以て定めて完全  
なる宗教ならんと誤解して之を信奉するもの多かりしによれり故を  
以て日本主義の流行と共に我國國民は其國固有の宗教を奉せざるへか

らさるるを感じ佛教の勢力漸く恢復するに至れり

哲學の流行及び日本主義の流行に就ては余も聊か力を盡したる所な  
きにあらず余は大學に在りて自ら哲學を専修せしのみならず世間に  
哲學を普及せんとに力を盡せり故に在學中余か主唱者となり先輩諸  
氏と計りて哲學會なる一會を組織せり(明治十七年一月廿六日開會式  
を舉行す)而して大學を出てたる後は哲學擴張の爲めには哲學書類を  
發行するの必要を感じ自ら發起して哲學書院を開きたり(二十年一月)  
又余か首唱并主任となりて哲學會雜誌を發行し(二十年二月五日)編輯  
所を余の宅に設けたり次に哲學普及の爲めには哲學教授の道を開く  
の必要を感じ哲學館を創立せり(廿年九月十五日)其後哲學の應用を講  
ずるの急務なるを知り館内に哲學研究會を開きたり(二十三年七月三  
日)以上は皆余か發起首唱したる者なり次に日本主義の擴張に就ては

余は初め二三の友人と相計り同志相合して政教社を起し日本人なる雑誌を發刊したり(廿一年四月三日)とは單に政治上の主義なるも余は更に學問上の主義を日本風に化せんと欲し西洋より歸朝後直ちに日本大學設立論を草して其主意書を天下に發表せり(廿二年七月)次て其翌年資金募集の規則を發布せり(廿三年九月)是より全國一周を企て其翌年より資金募集に着手せり其着手以來本年(即ち二十六年)二月迄其地方にありし時日合計三百九十五日にして其巡回せし場處は一道一府三十一縣四十七ヶ國二百十八ヶ處なり而して演説の數八百十一回にして一回の聽衆平均五百人とすれば四十万以上の人に日本主義の必要並哲學擴張の必要を知らしめたり尙ほ進て全國四千万の同胞に此主意を知らしめんと是れ余か祈願する所なり

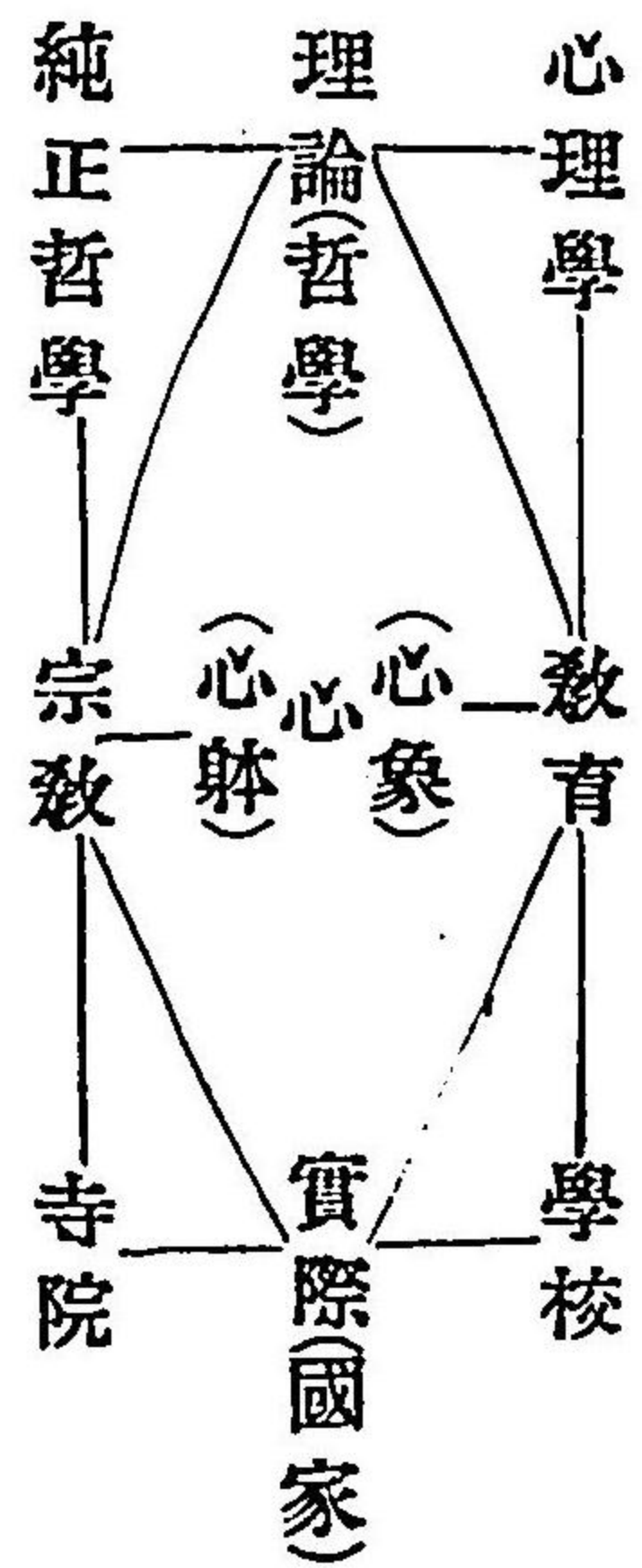
前述の如く余は此日本主義の擴張と哲學の普及とによりて多少佛教

の再興に力を盡くして今日に至り其精神は前後更に變することなし然るに世人は余か目下日本大學設立の事業に全力を盡くせるを見て初に佛教恢復の有力者なりしも今は其精神を變して佛教外の事業にのみ奔走すと云ふか如きは是れ全く余の目的を知らざる者なり余か大學設立論は獨り日本主義を學問上に振起するのみならず佛教を學術上より講究するの道を開き以て世間の學者に佛教を知らしめんとするにあり是れ余か今日の急務なりと信する所なり然れども余は又多少世間の佛教家と意見の異なる所なきにあらす余は教育と宗教との間に立ちて一方には教育を盛にし一方には佛教を興さんとし以て二者の調和を計らんとする者なり是れ余か初め佛教再興の一念より其原因を推究し來り其結果我國今日の急務は教育宗教の二者を共に振起するにありを感せしを以てなり

上來陳述せし所は余の今日までの經歷にして未だ曾て人に對して語りしとあらされども今教育宗教の關係を論するに當り其經歷を述ぶるの必要を感じ此の如く開陳せり

### 本論

教育と宗教とに二種の關係あり一は理論上の關係一は實際上の關係なり即ち理論上にありては哲學に關係し實際上にありて國家に關係するものなり而して理論上に教育の基つく者は心理學にして宗教の基つく所は純正哲學にあり此の純正哲學の哲學たるは言を俟たず心理學も亦哲學に屬するものなり實際上には教育は學校を設立して子弟を訓育し宗教は寺院教會を設置して一國人民を教導す而して教育も宗教も共に人心を目的とするものにして其中教育は心の現象上に關係し宗教は心の本體上に關係す故に吾人の一身中に心を以て教育と宗教との二者を結合するなり此の關係を表示すれば左の如し



教育の定義は種々あれども其の目的は知識を開發するに外ならず勿論教育の關係する所は甚だ廣漠にして單に知識のみならず情感にも意志にも又肉體にも關係するものなり然れども其主とする所は知識開發にありと云ふを得べし宗教の目的は亦種々あれども其重なる者は心靈を安定するにあり此心靈と知識とは共に我人の一心なり只其間に躰象の區別あるのみ即ち心靈は心の本躰を義とし知識は心の現象に屬す之を理論上より云へば一は心理學に基づき一は純正哲學に據る又之を實際上に應用すれば學校寺院の組織を生ず余か以下講述

せんとする所は此順序に従ふものにして先づ初に理論上の關係を陳べ次に實際上の關係に及ぶべし

### 理論上の關係

理論上にて云へば教育には通例躰育と心育との二種を分つ而して其心育中智育情育意育の三あり躰育は生理學に屬し心育は心理學に屬す故に教育は生理、心理を並説するを要す然ども教育本來の目的は心育にあり其躰育を加ふるか如きは他なし心意の發達を期せんか爲に其身躰の育成及び健康を謀るを以てなり故に教育の最も關係ある者は心理學なり然らば其學は如何なる關係を教育の上に與ふるかと云ふに心理學は智情意の性質規則を攻究するものにして其結果を實際に適用するものは教育なり即ち心理學は理論にして教育は應用なり

故に心理學の講究は教育を實施するに缺くへからざる學問なりと知るべし

宗教は其何の種類たるを問はず皆心を以て目的とするものなり然れども其心たる生滅ある心を指すにあらず不變不化の靈魂を云ふなり故に宗教は學問上より考究するときには心身の實在を論定せざるべからず又宗教には心外に神佛の如き最上無限の實體を既定するものなれば理論上其存する所以を證明せざるべからず而して學問上心の本體、神佛の實在を論明するものは哲學を措て他に求むべからず是れ余か宗教は學問上にありては哲學に屬すと云ふ所以なり

然らば教育學は其儘心理學にして宗教學は其儘哲學なりやと云ふに決して然らず教育學も宗教學も各理論的と實際的との二種あり教育學中實際を主とする實際教育學は教授術管理法等の實際に關する部

分を講究するものにして直接に哲學に關係するものにあらず之に反して理論を主とする理論的教育學は直接に哲學と關係するものにして心理學即ち是なり又宗教學にも實際に屬する儀式的宗教學と理論に屬する論究的宗教學とあり何れの宗教にも其宗祖の製作せし經文あり佛敎の一代經、婆羅門敎の韋陀、耶蘇敎の新舊約書、回教の可蘭の如き是なり而して其本經の説く所の眞理非眞理は措て問はず經文の一字一句を讀誦解釋し之によりて布教傳導を目的とするものは余は之を儀式的宗教學と云ふ或は其經文の解釋のみを事とするに於ては註釋的宗教學と名くべし之に反して理論上より其經文の説く所果して眞理なりや否やを攻究するものは論究的宗教學にして余か宗教學の哲學に屬すと云ひしは此部分を稱するなり此の如く教育も宗教も理論的講究上より云へば共に哲學に屬するなり

次に心理學と純正哲學との關係を陳べんに凡そ哲學には二種の部分ありて一を有象哲學と云ひ一を無象哲學と云ふ有象哲學の重なる者は心理倫理等の諸學にして無象哲學は即ち純正哲學なり此の如く心理學純正哲學は哲學中最も緊要なる部分を占むる者にして其原理に本きて教育學宗教學を組成するなり今心理學と純正哲學とを比較せんに心理學は部分學にして純正哲學は統合學なり心理學は心の一部分を考究し純正哲學は物心神三者の全軀を考究す心理學は心の現象を研究し純正哲學は物心神三者の本軀を研究するものなり此の如く二學の性質各異なるか爲に其研究の方法も亦從ひて異なり心理學は理學的方法にして純正哲學は哲學的方法なり理學的方法は感覺を標準とし哲學的方法は思想を根據とす蓋し心の現象は我感覺上の經驗によりて認識するを得るものなればなり然るに純正哲學は本軀上

の研究なるか故に感覺の及はざる所に入りて證明せざるべからず故に理學的方法は經驗に依り哲學的方法は論理に依る  
 心理學は其研究の方法理學的なるが故に又之を理學(Science)の一とす  
 るなり此點より觀れば理學に有形的と無形的を分たさるべからず有形的理學は物理化學等の諸學を云ひ無形的理學は心理倫理等の諸學を云ふ今教育學を之に配すれば其心育の理論を講究する心理學は無形的理學に屬す而して教育中の躰育は生理學の道理に本くものにして其學は有形的理學に屬す此意味より云へば教育學は全く理學に屬するものなり古代に在りては諸種の學術皆哲學中に包含せられ今日の所謂理學の如きも之を「ナチュラルフイロソフィ」(萬有哲學)と稱せしが今日は哲學の區域理學の爲に削減せられ心理學の如きも之を「メンタルサイエンス」(心意的理學)と稱し理學中に包括せらるべしに至れり然れど



も今日我國に使用する理學なる語は單に有形的理學を稱するものなれば無形的理學に本く所の教育學は哲學に屬するものと謂はざるべからず

心理學を理學とし純正哲學を哲學とする説に従ひ教育は理學に屬し宗教は哲學に本つくものとせば茲に理學と哲學との關係を一言せざるべからず凡そ世界には可知的と不可知的との二種の部分あり中成就て理學の研究する場所は可知的の範圍に限るものなり哲學も亦理學的に研究する學派にありては可知的のみに止るものとす即ち佛國  
 コント等の唱へし所是なり英國のスペンサーも亦多少之か影響を受け其哲學中に可知的不可知的の分界を説き學術上講究すべきものは獨り可知的の範圍内にありとなせり又可知的の中に既知と未知とあり理學は既知より未知に進むものにして哲學は可知より不可知に及

ほすものなり而して哲學は絶對上より論ずれば可知も不可知も一なりとす何となれば不可知的其者も吾人の全く知り得ざるに非ず吾人は既に不可知的なりと知りたるなり既に不可知的なるものありと知れば不可知も亦可知名なりと謂はざるを得ず若し又相對上より論ずれば不可知は不可知、可知的は可知にして此二者其別ありとするなり要するに理學は可知的界に止りて其中既知より未知に及ぼし哲學は可知的不可知的の兩界に涉りて可知名より不可知に及ぼすものなり然るに今又未知と不可知とに就て未知は人智によりて知り得べきものにして唯今日未だ知られざるのみ不可知は人智何程進むも到底知り得べからざるものに與ふる名稱なりとするも其分界明ならざるを以て二者同一なりと云ふ者あり然れども人智に限りある以上は其力の到底及ばざる不可知あるとを許さざるべからず又理學は可知的範

圍内に限るものと爲さるるへからず何となれば理學は感覺經驗を基礎とし感覺經驗上の事實に照して知るへからざるものは確實と認定すること能はず然るに感覺經驗は有限なるものにして其力の及ばざる所あると明かなり果して然らば未知と不可知とを分ち理學は可知以内の學にして其範圍外に不可知的存在するを許さるるへからず之に反して哲學は思想を根據とするものにして思想なるものは有形無形を問はず過去と將來とを論せず可知的を超えて不可知の中に論入する者なり故に思想には制限なく可知と不可知との區別も思想自ら定むる所にして如何なる定義も一切思想の與ふる所なれば思想其者には定義を下すを得ず而して哲學は思想によりて推究する者なれば哲學にも亦其定義を下すと難し然らば哲學は其區域極めて廣大にして思想と其範圍を均ふする者なり然れども單に學術と云へば理學

も哲學も此中に入らざるを得ず且つ理學哲學共に一致する點ありて人智を中心とするは二者の相同しき所なり只其研究の方法たるべきもの一は感覺を以てし一は思想を以てするの差あるのみ又單に既知の點に止りて考ふれば未知も現在の不可知にして不可知も矢張り未知なり然らば理學哲學共に可知より不可知に及ぼすものと云ふも敢て不可なるとなし

理學は單に相對の上に論し哲學は相對絶對の上に論するものなるか故に理學は哲學に比すれば甚區域狹隘なり而して哲學より理學の説く所を見れば甚た淺薄なるか如く理學より哲學の論する所を見れば甚た不確實なるか如く思はるゝなり若し理學を單に有形的となさば尙一層狹隘なるものなり心理學倫理學の如き昔は皆哲學の範圍に屬せしか今は之を理學的に研究するの道を開き理學の中に加ふるもの

あるに至れり是れ唯理學の意味に廣狹の差あるによるのみ  
 若し理學も其廣き意味によりて有形無形を總括すと云ふ説に従はし  
 教育は理學に屬し宗教は哲學に屬すと謂ふへし此區別によれば教育  
 は可知的の範圍に於て成立し宗教は不可知的に關係して成立するな  
 り今之を心の上に就て云へば教育は人の成長と共に次第に變化する  
 心象に基づき宗教は終始不變なる心身に基つく既に教育は變化する  
 心を取るを以て現在一世を目的とし宗教は不變の心に本つくか故に  
 廣く過去未來に亘りて三世に相關す畢竟教育は可知的に止り宗教は不  
 可知的に本つくより此差異を生するなり又道德に就て云へば教育宗教  
 共に道德を支配するものなり然れども其間に區別ありて教育は心象  
 上に道德を説くを以て現在一世に限り宗教は心身に道德を談する  
 を以て未來の賞罰を説く而して教育は外部に在りては社會の制裁を

以て不義非道を矯正し内部に在りては良心の命令を以て善道を履行  
 せしむ然るに宗教は現世の行爲を原因として未來に其結果あるを示  
 し以て三世の賞罰を説く是れ必竟教育と宗教とは其目的相異なりて  
 教育は此世界に對して道德を守らしめ以て完全なる人物を作らんと  
 し宗教は人間以上世界以外の者に對して純善なる心性を開かんとす  
 るか故なり又真理の上に就て云へば教育宗教共に真理を目的とする  
 ものなり然れども教育は可知的内にして宗教は不可知的内なり一は  
 人間より見て真理とする者一は神佛より見て真理とするものにして  
 其見る所各異なり故に教育の真理は時によりて變遷するを免れざる  
 も宗教の真理は万古不易なりとす然らば教育は一般の學術に本つき  
 宗教は學術以外に存するものなりと謂ふへし  
 之を要するに理論上に於ては教育宗教共に哲學に基つくと雖も其間

相異なる所ありて教育は可知的に止り宗教は不可知的に關係するか故に教育は理學に屬し宗教は哲學に屬す是れ一應の區別なり更に深く考察するときは宗教は眞理を以て万古不易と既定するものなれば之を學術の範圍に入るへからず此の如く論究するときは教育宗教の二者は全く相離れたるものと斷定せざるへからず即ち上來論する所の點左の三段に分る

第一段 教育も宗教も共に哲學に本くと

第二段 教育は理學により宗教は哲學によると

第三段 教育は學術にして宗教は非學術なると

此の第三段の斷言に従へば教育と宗教とは其性質全く異なるものにして教育の本く所の學術は可知より不可知に及ほし宗教は不可知より不可知に及ほすものなり故に教育と宗教とを對照せば一は勢力の作

用に依り一は情感の作用に依り一は論究を主とし一は信仰を主とし一は道理に本き一は天啓に本くものなり之を表示すれば左の如し

教育(可知的)——智力——論究——思想——道理

宗教(不可知的)——情感——信仰——直覺——天啓

即ち教育の道理は可知的界に屬するを以て智力思想の論究によりて知るへしと雖も宗教は人智以外不可知的に屬する以上は我情感上の信仰若くは天啓によるより外に之を知る道なし然るに茲に一問題あり即ち宗教は不可知的より可知的に及ほすと云ふも吾人は智力の作用を借らすして如何にして不可知的を知るを得るかと云ふと是なり之を知るに宗教上二法あり一は人間中の大聖人或は豫言者例へば佛敎の釋迦、耶穌敎の基督の如きによりて吾人自ら知るへからさるとも其敎示によりて知るを得へしと云ひ一は吾人各自の直接に其心に感

知するに依て其事情を知るを得へしと云ふ即ち吾人は亂心を沈め靜に考察するときには自然に不可思議の妙理を感受覺知するとある是れなり此二法は共に天啓なれども前者は豫言者の訓示を信し後者は各人自ら直覺するものなり故に二者共に我人の方より推知するにあらずして不可知の方より啓示するものなれば之を天啓と云ふ其一是間接の天啓にして其二是直接の天啓なり又内外兩界に於て天啓を感ずるとあり内界は心内の直覺に於てし外界は宇宙の現象に於てす而して内界は神秘即ち神人交感を以て天啓とし外界は靈性即ち奇跡怪事若くは万有の靈妙を以て天啓とす左に天啓の種類を表示すへし

天啓

間接直接

間接即ち豫言者の訓示  
直接即ち自己の直覺

内外兩界

外界即ち靈性  
内界即ち神秘

然らば天啓は如何にして有り得るか此天啓を説くに耶蘇教の如く天變地異は人間と同様なる意志を有する神の爲す所とすれば甚だ容易なるへきも佛敎の所謂眞如の如きものより説明するは大に困難なりとす今之を説明せんとするに先づ人類は果して完全なりや否やと云ふとを考へざるへからず抑も宇宙間に存在せる森羅万象を探究するに決して人類を以て完全なるものと斷定するを得ず人類の感覺機官は其數僅に五種に過ぎず而かも其五官は皆不完全なるを免れず又人類の智識思想は時々刻々變化して極りなく人々の知ると思ふと各異なりて定りなし故に人類より見れば此宇宙には知るへからざるものありて不可思議の世界あると疑ふへからず然るに吾人の現在不可知となすものも將來知り得へきとあらんと云ふ者あり然れども人類の進歩には程度あり吾人の今日不可知とするもの將來其智力進て今日

に數倍せる者とならば幾分か今日知るべからざるものを知り得るとあるべきも尙ほ其前にある不可知は必ず多かるへし十を得は百あり百を得は千あり千を得は万あり到底盡くる所なくして無限ならん且吾人は將來幾万の星霜を經過せば或は最上至極の境遇に達するを得へしと假定するも地球其者にも一定の壽命ありとするときは人間にも全く其種類を絶滅する時あるへし果して然らば人類世界にありては不可知的なるもの永く存するとは疑ふへからず此の如く人類は微弱不完全なる者なれば我智力を以て進みて不可知的の本體を知るを得ず然れども吾人の方より多少其體に向ふて探るを得は又不可知の方よりも吾人に通するの道なかるへからず抑も不可知的なるものは吾人を離れて遼遠なる處に獨存するものにあらす吾人に最も近き處即ち吾人の身心既に不可知的なり渺茫たる天地より一滴の水一撮

の土に至るまで深く其理を究れば一物として不可知的ならざるはなし就中吾人に最も近き極點は吾人の心なり例へば地球の内部に含蓄せる火の外部に噴出するは其最も薄き層よりするか如く可知と不可知との間に厚薄を異にする界壁ありと假定せば其最も薄き處は心なり故に不可知的の其氣を可知界に噴出するには先づ我心を以て噴火口とし其内部に啓示を感じるなり夫の釋迦其人の如きは噴火口の最も大なるものなれば其心中に於て不可知的の靈氣を噴出せると最も多かりしと謂ふへし然らば釋迦の如きは生ながら賢明にして毫も修行も苦心も要せざるへき道理なりと云ふに、こは耶蘇教に於て解すれば稍困難なる點にして耶蘇は父なくして生ると云ふか如き既に此世界の規則を破りたる者なれば三十歳に達するを待たず生れながら世界を震動するに足る不可思議を開現すへき理なれども佛教にて云へ

は原因結果の規則を基本とするを以て此世界に生るゝ以上は假令如何なる大聖人なりと雖も万有自然の規則に従はざるを得ず釋迦は既に人類の規則に従て此世界に誕生せる以上は其智識の開發も亦人類一般の規則に従はざる可らず然れども其結果に至らば大に他に異なる所あるを見るへし譬へは地中より出てたる寶玉は其瓦石と異なるとなきも漸く琢磨して其結果に至り大に異なる所あるを見るか如し蓋し釋迦の如き大聖人は其心内に包有する美玉は千里を照す力を有するも其の初めて人胎に宿りて形體を結ぶに當りては更に他人と異なる所なし漸く生長して心内の美花一たひ開くときは不可思議界より發する大光明を其上に放ち衆人の仰歎する所となるなり之を要するに可知不可知兩界の交通する關門は吾人の心にして此心に於て直ちに不可知的天啓を感受するなり是れ宗教上に於て觀念を修め戒

律を保ち以て心の沈靜を計る所以なり若し夫れ妄念の雲霧一たび消散せば朝々たる眞如の明月は靈然として其清光を四方に放つに至るへし

次に外界に於ける啓示に二種あり其一は外界の規則に反するものを取て啓示とする説是れ耶穌教の唱ふる所にして原因なくして結果あり親なくして子を生み死せるもの復活する如き皆神の自在力の作す所とす斯る不道理なる啓示は今日決して許す可らず佛教にも亦外界の不思議を説くとなきにあらずれども是れ固より道理の證明を待たざるへからず之に反して第二は外界の規則の秩然として亂れざる中に於て自然に不可思議を感知する説こは道理上許すへきものなり例へば秋の夜蒼々たる中天に懸る明月を眺め冬の日滿目皚々たる雪景を觀れば自ら天地の美妙を感じ不思議の觀念を起すか如き是れ矢張

一種の啓示と謂ふへし此に由て之を觀れば此宇宙の内部には一大勢力を包有し此勢力の發現によりて天地其位を保ち万有其形を現せしか如し此説たる單に宗教上の想像にあらず今日諸學者の唱ふる所なり理化學の攻究によるに宇宙の始め渾沌たる一物あり之を星雲と云ふ星雲漸く回轉を生して遂に千萬無量の世界を形成するに至れり而して其回轉するは其内部に包有せる勢力の開發ならざるはなし此勢力發現して物力となり生活力となり感覺力となるも其最も純粹なるものは人類所有の心なりとす此勢力とは余か所謂不可知的躰中より發するものにして之を佛教にて言へば眞如自躰より生ずる大活力なり此點より見れば天啓も亦全く道理なきにあらず

凡そ宗教は如何なるものにてても天啓を説かざるはなし若し天啓を加へされは決して宗教となるを得ず唯其天啓とする所先きに擧ぐる如

く内界外界直接間接の別あるを以て宗教異なれば其説く所亦異なるのみ今佛教の如きは主として内界の啓示を説くものにして或は一切衆生悉有佛性と云ひ或は心佛及衆生是三無差別と云ひて吾人若し妄念の雲を一掃すれば誰にても其心内に於て眞如の月光を開現せしむへし而して其雲を拂はんと欲せば觀法戒法等の手段に依らざる可らず故に吾人か道德を行ふも亦妄念を掃ふ一手段たるに過ぎずとなす是れ佛教一般の通説とする所なり之に反して耶蘇教の如き無限の自由を有する神を立つる宗旨は吾人は善を爲すも其善果して神の意に適するや否や之に由りて果して神の救助を蒙るべきや否や得て知るへからざるも神は善人を愛するものなるべきを以て吾人は善を爲して神の意を迎ひ以て其救助の命を待たざるへからずと唱ふるに至るへし



上來陳述せし所を以て之を見れば教育は現在世界に於て完全なる人物を造出せんか爲めに智識道德の育成を期するに至り宗教は人類をして不可知的界と通し且つ之れに達せしめんとし其手段に道德を修めしむるなり此の如く教育は人類一生の間に限るものなれば其見解を以て不可知的に涉れる宗教の道理を領會し得らるへき理なし又宗教は不可知的に本つくものなれば教育の道理の極めて淺薄なるを感するなり斯くして教育者は宗教を攻撃し宗教者は教育を擯斥するの傾きあり或は又雙方共に他の領分を犯し之をして各自の範圍内に入れんとする風あり是に於て二者の衝突を生するなり然るに二者其範圍既に相異なるものなれば各其本領を守り相犯すとなければ衝突の不幸を來たすへき理なし

昔時學術の未だ開けざりしに當ては天啓一方に偏する弊ありしも今日にありては務めて其弊を避けざるへからず耶穌教の奇蹟怪談の如き全く道理に反する以上は縱令天啓なりとするも決して真として許すへからず何者真正の天啓は道理に反するものにあらずして二者互に表裏をなすものなればなり故に真正の宗教は天啓と道理と相結合するを要するなり若し天啓一方に偏せば獨斷に陥り其甚きは妄信となり道理一方に傾けは懷疑に陥る宗教を論する者豈戒めざるへけんや

然らば宗教は何の道理に依るかと云ふに前述の如く純正哲學に依るものなり宗教の根本たる不可知的は古來哲學者の唱道する所にして易の太極及び孔子の所謂天は不可知的なり老子の無名も不可知的なり其他莊子の眞宰、墨子の天鬼、列子の疑獨等各其考ふる所異なれども

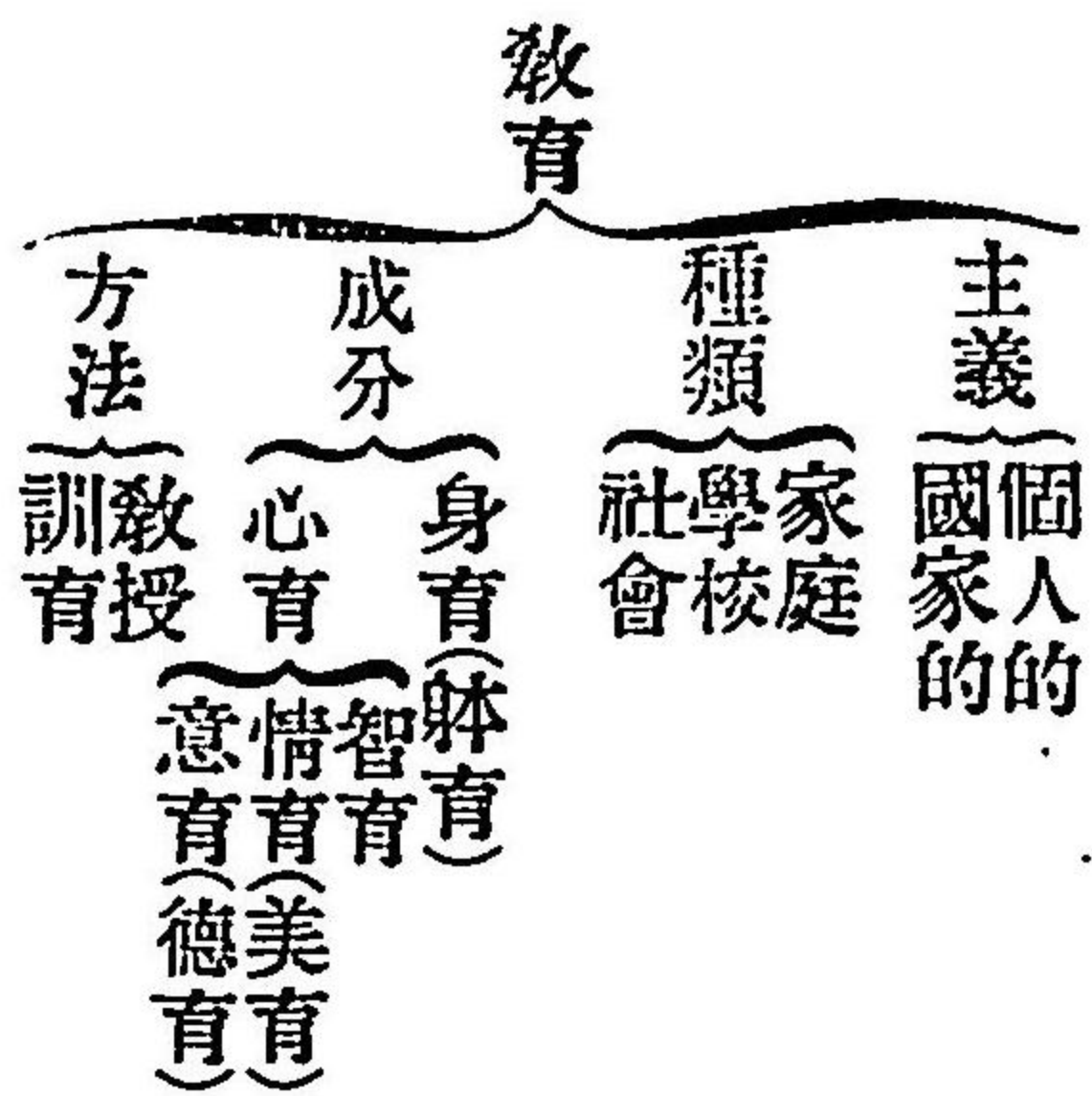
皆不可知的を假稱せるなり又西洋の哲學者の如きもソクラテスの神、プラトンの理想、スピノザの本質、カントの自覺、フイヒテの我、シェリングの絶對、ヘーゲルの理想、シッペンハワーの意志、スヘンサーの不可知的等皆之に同じ只其形容の異なるのみ恰も盲人の象を探りて或は其鼻を以て象とし或は尾を以て象とし或は足を以て象は此の如きものなりとして唯其一斑を評して全軀を知らざるか如し斯して哲學上より探究するときは不可知的の存在を知るへしと雖も哲學は之に達する方法を講究するものにあらず然るに之に達する方法を説示する者は宗教なり而して其方法一ならざるを以て宗派の別を生ずるなり  
上來陳述する所之を要するに理論上にありては宗教と教育と全く相異なる所あり又相一致する所あり而して其相異なるは内外其道を異にし表裏其門を異にする迄にて其目的とする所に至りては一なり即

ち眞理に本きて人心を目的とするに至ては一なり故に其講究は共に哲學によらざるへからず果して然らば教育家も宗教家も共に相和し相助けて各、人心の完全を期して互に衝突するとなきを望まざるへからず以上は教育其者と宗教其者との關係について論したるのみ若し教育は如何なる主義を取り宗教は何教によるかは次の實際論に於て余か意見を述べんとするなり

### 實際上ノ關係

次に實際上教育と宗教との關係を述べんに余は前講に教育と宗教との區別を論し教育は道理を本とし宗教は信仰を本とし教育は心象に關し宗教は心軀に關するものなるを述べたり換言すれば教育は知識を開發するを主とし宗教は精神を安定するを主とするを述べた

り一は開智にして一は安心なり  
 今此に實際上の關係を示すに當り先づ此二者の分類を掲ぐるを要す  
 第一に教育を分類して主義、種類、成分、方法の四とす其中主義に個人的  
 と國家的との二種あり種類に家庭、學校、社會の三種あり成分(或は性質)  
 に身育(躰育)と心育との二種あり其中心育に智育、情育、意育の三あり而  
 して方法に教授と訓育との二種あり之を表示すれば左の如し



第一教育の主義について個人的教育とは一個人を目的とし完全なる  
 一個の人物を養成せんとするにあり既に一個人を目的とする以上は  
 國家の干渉を要せず各自の自由に任すへしとなす從來我國の教育は  
 政府の干渉の有無に拘らず個人養成の主義を取りたるものなり國家  
 的教育とは國家を目的とし完全なる國民を造り以て國家を完全なら  
 しめんとするにあり故に此點に於ては一國政治の機關たる政府は其  
 義務として教育に干渉せざるへからず又之に干渉するの權利ありと  
 なす而して一國を組織する人民も亦國民として教育の義務を負擔す  
 へきものなりとなす西洋にありても或る國は個人的の方針を取り或  
 る國は國家的の主義に依る是れ皆其國情の然らしむる所なり第二教  
 育の種類は學者に由りて其見解を異にし茲に載せたる家庭、學校、社會  
 の三種の外尙ほ自然教育、美術教育等ありとす然れども若し其最も狭

き意味より云へば教育は學校教育の一種に限る今論する所は重もに學校教育について云ふなり第三教育の成分或は性質は大別して身心の二育とす此他宗教教育を加ふるとあり西洋諸國には耶蘇教と教育と混同すれども我國には宗教の學校教育に加はるとなし然れども家庭教育社會教育中には加はるを以て教育の廣意より云へば宗教教育も亦其一成分たり而して教育の成分中身育即ち躰育は身躰の健全を計るを以て目的とし心育中智育は眞情育即ち美育は美意育即ち德育は善を以て目的とす恰も情操の上に於ては智情美情徳情の三者ありて眞善美の三性を目的とするか如し智美德の三情の外に宗情あり是れ宗教情操にして其目的は妙を感じるにあり此妙は眞善美三者の合して一となる者なりとなす然らば教育に於ても智情意三育の外に宗育を加れば其目的は妙に達するにありとす然れども今は教育と宗教

とを區別して論述するを以て宗育は除きて此中に加へず第四教育の方法は種々あれども今は大別して教授訓育の二とす教授とは書籍器械等を媒介とし言語説明によりて教育するものにして訓育とは行爲舉動を以て感化訓示するを云ふなり而して此二法は其目的共に人智を開發するにあり

第二に宗教も教育に準して主義種類性質方法に分類せば主義に個人的と國家的との二あり種類に自然教と天啓教との二あり或は道理教と直覺教の二種に分つも可なり性質に拜物教と拜神教とあり拜神教に多神教一神教凡神教あり方法(信仰の方法)に自力と他力とあり之を表示すれば左の如し

——**主義**——  
個人的 國教  
國家的 公認教

宗教

種類	自然教(道理教) 天啓教(直覺教)
性質	拜物教 多神教 拜神教 一神教 凡神教
方法	自力 他力

第一、主義の中、個人的主義とは信仰は各人の自由に放任し政治上毫も之に干渉せざるを云ひ國家的主義とは信仰は各人の自由なるも其力相結びて團體を形成し教會を組織し之か爲に大に國家の治亂興廢に關係するを以て政治上之に干渉するものを云ふ此國家的には國教と公認教との二種あり國教は國家が政治上の機關として宗教を利用するものにして魯西亞及び英吉利の如し公認教は政教分離の方針を取

り直接に關係せざるも政府は一國の治安を保護する爲めに其國の宗教として可なる者に公認を與ふる制度にして現今佛蘭西は此制度を用ふ要するに國教と公認教との差は政府の干渉の度の多きと少きとによるなり又個人的は全く政教の關係を絶ちて宗教は政治以外に獨立するものにして米國の宗教の如し第二種類は通例自然教と天啓教とに分つ自然教とは万有の規律に基き心性の發達に應じて自然に人間中に起りたる宗教を云ひ天啓教とは人心自然の發達に依らずして神の或る特殊の人に與へし啓示より起りしものを云ふ自然教は支那の儒教道教の如きものにして自然に人心中に發達したるものなり天啓教は耶蘇教回々教の如きものにして或は神の子として生れ或は豫言者として生れたる人の天啓を説きたるものなり又自然教と天啓教との區別に代ふるに道理教直覺教を以てするも可なり然れども自然

教と道理教とは其意義同しからず道理教は道理を基本として宗教を講ずるものにして哲學上より論ずる所の宗教或は現今歐米に行はる「ユニテリアン」宗若くは自由神教之に屬す直覺教は道理以外にありて我人の直接に其心に感知するものに本きて立つる宗教にして普通の宗教是れなり第三性質には種々あれども拜物教、拜神教との二教に大別す拜物教にも或は日月を拜し或は動物を拜し或は草木山川を拜するものあり拜神教には多神教一神教及び凡神教（万有神教）あり第四方法とは其意漠然として種々あれども今宗教信仰上の方法を擧ぐれば自力と他力とに分つを得へし耶蘇教の如きは他力にして佛教は多く自力を主とすれども其中に又他力を説くものあり自力は佛と成り神となる原因我にありとし他力は彼にありとす我にありとするものは相對門にして彼にありとするものは絕對門なり自力は相對の上

に存する因果の規則により善行を爲して善果を得順次進みて不可知的界に達する者なり他力は絕對不可知の力に依るものなれば因果の規則外に立ち相對の階梯を踏むを要せず此二者中何れの方法に依るも其目的は人心の安定にあり

開智と安心とは一は教育一は宗教の目的とする所にして各々相異なりと雖も其間に又相一致する點あるを見るなり一人の上には教育の開智も宗教の安心も共に幸福を目的とする者にして一個人の上には身心の幸福なり一國の上には國家の福利なり教育上より云へば智識を開發して人の品位を高尙にし以て其人に幸福を與へ之を大にして一國の福利を増進するものなり又宗教上より云へば人心の安定は精神上の快樂なり精神上の快樂は人をして其生を樂み其地位に安んずるとを得せしむ若し人各満足を得る時は一國相和して決して亂るゝ

愛なし故に宗教も一國の上について云へは國家の福利を増進するなり、されば幸福の點に於ては教育宗教共に相一致する者と謂ふべし。是より教育には學校を主とし宗教には寺院を主とし此二者の上に就て陳ふへし學校には有形無形の二部分あり有形とは校舍書籍器械等にして無形とは智識の發育を云ふ寺院にも亦有形無形の二部分あり堂宇偶像裝飾等は有形にして信仰安心は無形なり元來教育宗教は無形を以て目的とすれども無形を進むるには有形の方便を借らさるへからず教育上人智を開發するには校舍器械等を要し宗教上人心を安定するには堂宇校舍を要す然るに教育宗教共に其方便たる有形を以て目的とし真正の目的あるを忘れ或は校舍を莊麗にし或は器械を整備するを以て教育の進歩なりと信する者多し宗教も亦然り安心立命の本來の目的なるを忘れ偶像其者を崇拜して神とし堂宇を建築して

布教の目的を達せりとするものあり是れ教育宗教の任に當る者今後注意せざるへからざる要點なり。

學校に種々あり或は専門あり或は普通あり或は實業を授くるあり或は學理を講ずるあり或は幼年者を教育するあり或は壯年者を養成するあり或は女子に限り或は盲啞に限りて教育するあり或は官立あり公立あり私立あり而して學校の制度も國に依りて各々異なれり之と同しく寺院にも其組織種々あり大概之を三組織に別つ第一は管長組織にして之に一管長と多管長とあり一管長に世襲と撰擧とあり世襲は日本の眞宗及び神道の二三派に限り撰擧は我邦の各宗管長羅馬法王及英國敎宗の諸敎正の如き是れなり次に多管長は希臘敎の制度なり即ち其宗は四管長を以て組織す第二は會議組織にして本山を設けず寺院の區域を定め代議士を撰擧して會議を開き一宗の事務を決議

す是れ「カルビン」宗及蘇國教宗の組織にして米國教會にも此組織に由るもの多しとす第三は獨立組織にして本山なく僧侶なく亦一宗の制度を議定する會議もなく各教會は全く獨立し決して他教會の干涉を受けず唯其教會を組織せる信徒相議して事務を處理す此組織は多く米國に行はるゝ所なり

斯の如く學校と寺院とは國によりて其組織制度を異にする所以は國異なれば其風俗習慣より万般の事情各異なるを以てなり教育も宗教も理論上に於ては何れの國と雖も同一ならざる可らず然れども之を實際に適用して學校を開設し寺院を建立するに於ては其國體國風に從て異にする所なかるへからず故に理論と實際とは之を區別して論ずるを要す若し之を混同せば其結果實に恐るへき弊害を生ずるに至らん凡そ事物には必ず理論と實際の別ありて理論は思想上にあるを

以て自由なるへきも實際上には内外種々の制限を受けざるへからず是理論實際の其性質を異にする所以なり

學校と寺院との關係に就て特に論述せざるを得ざるものは修身科なり修身科は從來宗教の支配を受け來りしものにして西洋諸國は現今と雖も尙ほ宗教の支配する所となれり是れ西洋諸國は政教混同の遺風今に存すると宗教の勢力尙ほ古來の習慣によりて盛なるとに依てなり蓋し古代にありては政治法律學問等總て混同したれども社會の進歩するに従ひ其組織複雑となり各部分漸く分業するに至れり故に今日に於ては倫理修身も宗教と分離して之を道理上に成立たしめ學術的に講究せざるへからず然れども如何なる宗教も修身道德を離れたるものなければ今後は修身道德を分ちて學術的と宗教的との二とせば可ならん即ち學校の修身は學術的に依り寺院の道德は宗教的に



依るとせば此間に混雜を生ずる憂なかるべし現今我國の教育は全く此方針を取るものなり凡て學校に教授する者は智力に訴へ寺院に説く所は情感に愬ふるものなれば學校の倫理は智力的倫理とし寺院の道德は信仰的倫理とするは其當を得たるものと謂ふべし此の如く二者其途を分つも共に國家を目的とし其福利を増進するを期する點に於ては一致せざるへからず之に就て學校と寺院との關係、學校と政府との關係及び寺院と政府との關係を茲に陳述するを要するなり

第一、學校と寺院との關係は其表面各々獨立するも裏面は互に連絡するものなり、されば學校のみ進歩するも教育の目的を達したるにあらず寺院のみ繁昌するも宗教の目的を果したるにあらず二者相待ちて並進せざる可らず其故は學校は教育を實施する所なれども教育に屬するものは學校以外にも尙ほ甚しとせず抑も學校に入學せんとする

には六七歳以上の年齢に達するを要し學齡以下の幼者には施すと能はざれば學校のみにては教育の成を期すへからざるや明なり故に學校は教育の一部分にして他の一部分は家庭即ち父母の任する所の教育なり而して其父母の智識を進むるは學校の任する所なり又家庭と學校との他に教育を助くるものは社會にして社會中最も勢力ある者は風俗習慣及び朋友間の交際なり而して社會の進歩は社會を組織する人の智識の進歩により智識の進歩は學校の教育によらざるへからず故に家庭と社會とを進歩せしむるものは一部分學校にありと謂ふべし然れども單に學校のみ進歩するも教育全體の進歩にあらず何となれば人の學校にある年月は僅々五年若くは十年にして其間終日終夜教師に接して教育を受くるにあらず故に假令學校に於て如何に完全に教育せらるゝも其外に家庭、社會の教育の之を助くるなくんば其

功なかるへし然るに家庭に於ては學校の如く道理を以て智力に訴ふる者にあらざれば自然に見聞するものに就て感化するを要するなり故に學校以外に家庭教育を補助する者は寺院なり寺院は一方には宗教上人をして安心せしむる講習所にして一方には道德を練習する集會所たり是を以て寺院教會は之を組織する所のもの一物として道德上の元素を包含せざるものなし何人と雖も一たひ此淨境に入らば自ら俗塵に汚濁せられたる邪念を洗滌し清涼なる道德心を喚起するに至るへし是れ兒童の教育上至大の關係を有するや疑を容れず又道德を守るの必要なる所以は何人も熟知する所なれども實際上之を履踐すること難しとす之を實行するには習慣の力に由らざるを得ず此習慣力を養成せんとするには時々練習せざるへからず而して之を練習するは寺院教會を以て適當とす今日村落到る處寺院の設あらざるな

く其寺院は大抵靜閑清淨の地にあり其裝飾も大に民家の風と其趣を異にして一村の人民隔日若くは一週一回此地に至り道德を練習し之を内にしては兒童の教育を助け之を外にしては社會の風俗を矯正するとを得へし是に由て之を觀れば寺院教會は教育の三種中家庭教育社會教育の一部分となる者にして寺院の性質は單に宗教のみならずして教育の意味にも包有するものなり又寺院に於ても學校教育の必要あり單に寺院を以て純粹の宗教組織と考ふるも多少學校其者の補助を要す何となれば宗教の信仰には高下ありて夫の婆羅門教徒の濁水を以て信仰の本分とするか如き下等野蠻の風習は學校教育の力によりて改良せざるへからず又宗教の傳導を爲すにも學校を盛んにして宗教家其者の智識を進歩せしめざるへからず故に宗教の上にも學校教育は缺くへからざる者なり

第二、學校と政府との關係とは即ち教育と政治との關係なり凡そ一國の工藝實業を盛にし富強文明を計らんとするには先づ人智の程度の進歩するを要す又萬國と對立して交通をなさんとするにも國民の智識は進歩し居らざる可らず又國家的觀念の養成は主として學校教育の與ふる所にして兵卒となりて其國を護衛するにも農工商にして外人と競争するにも第一に愛國の精神を有するを必要なりとす此の如く教育と政治とは密着の關係を有するものなれば政府は學校に干渉して其普及を計り且つ教育上國家的觀念を起さしむることを望まざるへからず現に我が國に於ても文部省ありて學校教育を支配す其の現今の教育制度の如きは既に何人も熟知する所なるを以て別段説明するを要せず

第三、寺院と政府との關係とは換言すれば宗教と政治との關係なり之

に就て信仰一邊より宗教を観察すると教會組織上より觀察するとの二あり凡そ社會に於ては貴賤上下の階級ありと雖も宗教には其區別なく同一に人をして安心立命せしめ同味の快樂を感せしむるものなり是れ宗教特有の價值なり詳言せば智識の點に於ては人各々高下の別、賢愚の差ありと雖も不變不化不生不滅の靈魂の上には其の區別あるべき理なし宗教は此靈魂を基本として説くものなれば之より得る快樂は何人も同一なり故に宗教は貴賤の上のみならず賢愚の上にも階級を設くるとなし是を以て世間政治界にありて不平の念を懷抱せる者も去て宗教の信仰を叩けば誰にても同様に其中には名狀すへからざる妙味あるを感得す故を以て世に望みなき貧民も精神上富人に勝る快樂を得るに至る而して社會多數の貧民及び不平の徒が宗教によりて精神上的快樂を得是によりて國家の平穩を來し政治上に利益

を與ふると尠しとせず若し彼等の徒にして不平を醫するの道なくんは社會は争亂の絶ゆる時なかるへし此點は宗教其者より觀察したる所にして即ち信仰一邊より來せる結果を云ふなり若し夫れ寺院教會か社會を調和する點に於ては政治上に一層重大の關係を有するなり社會に於ては貧富貴賤の階級あり男女老幼の差あり賢愚高下の別あり職業の異なるあり郷里の異なるあり各其の間に懸隔あるか爲に政治上には互に分離排斥する傾向あり然るに其間に立ちて之を調和し平穩無事ならしむるものは宗教の力なり政治一邊にては下情は上に通せず上意は下に達せず上下の間懸隔澁滯し之が爲に其下に壓伏せる民心人氣は一朝破裂して一大革命を起すことあり然れども同一の宗教に歸する者は貧富貴賤男女老少を問はず悉く同一の坐席に集會し互に友情を通し談話を交へ是によりて自ら社會の調和を生ずるな

り此の如く宗教は國家に利益を與ふるものなれども凡て利益ある者は又必ず裏面に害毒を有するものにして若し實際に適合せざるとあれば國家を害すると尠なりとせず或は宗教上の不和より政治上の不和を起し一國を攪亂するとあり或は政治上の不平轉して宗教内部に入り以て政教の軋轢を生ずるとあり古來宗教が或は國家を利し或は國家を害せしとは歷史上吾人の屢々經驗する所なり然らば一國の機關たる政府は宜しく其國に適合せる宗教を保護し以て其國の治安を圖らざるへからず尙ほ茲に一言すへきは宗教は社會の儀式禮節を支配すと云ふと是なり我國には西洋に比して其例少なきか如きも尙ほ神佛二教相分れて冠婚葬祭の大禮を支配す是れ又一國の安寧秩序を保持するに於て與て力あるものなり蓋し人情の影響たる至大にして能く之を調和すれば以て一國を利し若し之を激昂せしむれば以て

一國を亂る而して儀式禮節は社會の人情を調和し秩序を保つものなれば決して之を輕忽に付すへからず其他宗教の國家を利するは異郷他村の人を結合するにあり例へば村落を異にするときは其間に婚縁を結ふと難きも宗教の媒介によりて異郷の間に交婚するに至る又人民の一地方より他地方に動くは一國の文明を進ましむる助となるものなるが是亦多く巡拜參詣等の宗教の媒介による之を要するに宗教は宗教其者の上より社會を利し又政治に參與して國家を利するものなり

次に國家の獨立と教育宗教との關係を述へんに凡そ一國の興廢存亡には直接の原因あり間接の原因あり直接の原因とは兵力或は金力の如きものにして他國より兵力を以て攻撃せられ若くは國力自ら疲弊して滅亡するか如きは共に直接の原因なり然れども尙ほ此他に間接

の原因なかる可らず即ち其原因とは言語歴史或は人種及び宗教の三なり此三は國家獨立の三要素にして此三要素獨立せば國家も亦獨立するを得へく若し此三要素滅亡せば國家も亦滅亡すべし假令兵力金力の一旦國家を撲滅するとあるも此三要素の依然として其勢力を有するあらは再び其國を獨立せしむるとあるべし若し此三要素衰廢せる後之に加ふるに兵力金力を以て亡ぼしたる者は再び國家の獨立する期なかるべし若し又此三者中言語歴史の遺存して宗教獨り絶滅するも其國の獨立を保つと難しとす故に國を亡ぼす方法にも種々ありて其國の言語を改め歴史を變し宗教を化するは兵力を勞せずして人の國を亡ぼす秘法なり又一たひ兵力を以て亡ぼすと雖ども其國固有の言語歴史宗教依然として存すれば數年を出てすして再び獨立するを得べし然らは何故に言語歴史宗教が國家獨立の要素なるかと云ふ

に言語は人の思想を結合する機關にして他國に通せざる一定の言語を有するときは一國人民の思想を連合して一と爲すを得へし若し其國の言語にして一國中に通ずるとなくは以て其國の人心を一結すると難し若し又隣國の言語を用ふる者は尙ほ一層其國の獨立を保つと難し支那は一國中其言語異なれども其の文字同一にして且つ其言語は他國に通せざるものなれば國家の獨立を妨くるに至らす西洋に於ては瑞西の如きは他國の言語相混し又埃太利の如きは言語のみならず人種も大に混同せるを以て國民の統一を缺くの恐あり之に反して英佛獨の如きは假令互に其國境を接するも其國一定の言語を有するを以て國家の獨立上非常の便益あり又國民は一國同一の人種より成りて其國始めて獨立するものなるを記せざるへからず今日万國の互に相競争するは其實人種上の競争たるに過ぎず若し一國にして數

多の人種混同せば到底其國の人心を一定すると能はず故に一國の獨立には人種の一定せるを必要なりとす而して此人種は其國の歴史を形成するものにして同一の人種ありて同一の歴史を以て今日に及ぶとせば其人は其國を保護せざるを得ざる觀念を生するなり若し一朝其國の覆滅するとあるも其國古來の歴史存するときは是によりて其興復を企圖するもの必ず起るへし然れども假令其國歴史あるも其國民にして之を知らざれば何の用をも爲さざるなり故に其國の人民に歴史を知らしむるとは教育上の要務なりと謂ふべし次に宗教は直接に人間の精神に關し精神と精神とを結合する一種の連鎖なりされは一國の人心を團結して一致せしむるには宗教の一定を必要とす今日は西洋諸國何の國と雖も皆信教自由を唱ふれども尙ほ各國教若くは公認教を設置する所以は政治上宗教一定の必要なるとあればなり

此の如く言語歴史宗教の三は國家の盛衰興亡に最大の關係を有するものにして國家の興隆するも此三に依り國家の衰滅するも此三に依る然るに其中各種異なる所ありて言語は空間上に全國の人心を集合し歴史は時間上に古今の人情を結合す而して宗教は空間時間の雙方に跨りて人の精神を一結するなり蓋し宗教は其信仰の躰一なるを以て宗教を一定せは同時に數万の人心をも一結するを得又宗教は不變不易の眞理を既定するを以て古今に通して同一の思想を維持するを得故に宗教の言語歴史に比して尙ほ一層人心を結合するの力強く縱令其國一たひ滅亡するも尙ほ人心を維持するを得るなり彼の猶太人が其國既に亡て各國に散在するも尙ほ數百万の人民よく宗教上の躰をなすを以て宗教の團結力の強きを知るへし又波斯教徒が回教徒の爲に其故國を奪はれ遠く印度の一地方に流寓するも現在猶ほ印度の

地に一部落を結成し宗教上の團躰を失はずされは歴史は其國滅亡して長年月を経過すれば自然に消失し言語も人民他國に離散すれば亦長き年月の後、全く消失すへし然るに宗教上の結合は此の如き場合に際會するも確乎として動かすへからず之を要するに言語歴史宗教の三は其間に輕重の差なきにあらざるも共に國家獨立の最大要素たる者なり故に教育者は宜しく其國固有の言語を明にし其國の歴史を保存するとを勉め宗教家は其國固有の宗教を擴張するとを圖らざるへからず此三は國家の獨立上兵力金力よりも一層重要なる元素なり西洋諸國の盛に耶蘇教を東洋諸國に傳導するも多少其國の言語歴史を變して自國の人情風俗を移さんとするの意なきにあらず故に國家の上には其國固有の言語歴史宗教を保存し此三者の獨立に力を盡くさるへからず

教育は主として學校の任する所にして宗教は寺院教會の司とる所なり教育の國家に必要なるは何人と雖も熟知する所にして敢て余か言を待たず言語歴史の保存より學術工藝其他百般の事業に至るまで一として教育の興り關せざるはなし故に我邦維新以來政府は十分に教育の普及に力を盡して今日に至れり之に反して宗教の國家に至大の關係を有するは人の多く知らざる所なれば聊か其事を論述せざるべからず凡そ宗教は宗教として人心を團結するのみならず言語歴史美術工藝等一國の文明上に非常の關係を有するものなり蓋し一國の文明は必ず多少宗教の力を借りて發達せるものにして又一國の活歴史なる美術も多く宗教中にありて發達し且つ古代の美術は多く神社佛閣中に遺存せり又文學にも宗教の思想の入り來りて其趣味を興ふる者にして工藝と雖も宗教の信仰力によりて進歩したるの例甚しとせ

す此の如く我邦古來の宗教即ち佛教か我國の文明に影響せるとは歴史上事實の最も顯著なるものなり  
之を要するに教育宗教の効用は之を小にしては吾人一身の幸福安寧より進んで一家の和合快樂を得之を大にしては一國の文明富強を進むるなり

既に教育宗教の必要なるとは上來陳述せし如し然れども若し其教育宗教の方針を一定せざるときは國家に利益を興ふると難し否却て國家の進歩を妨害するに至るべし故に既に其必要を知る以上は一國の教育は一宗の方針を定め一國の宗教は一定の目的に向て進ましめざるべからず若し然らざれば教育には種々の分子混入し自國の國躰民情に反せるものを其儘採用するの恐あり又宗教上には他國より種々の異教侵入して爲に一國の人心を攪亂するの憂あり故に苟も國家の



獨立を維持せんと欲せば必ず其國の教育宗教の方針を一定せざるべからず

明治廿六年四月廿五日印刷  
全 年四月廿日發行

定價金十五錢



著者

井上圓了

發行者

井上圓成

印刷者

根岸高光

發行所

印刷所

哲學書院  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目二十三番地

獨立を維持せんと欲せば必ず其國の教育宗教の方針を一定せざるべからず

欠

MISSING

明治廿六年四月廿五日印刷  
全 年四月廿五日發行

定價金十五錢

版權  
所有

著者

井

上圓了  
東京市本郷區駒込  
蓬萊町二十八番地

發行者

井

上圓成  
東京市本郷區本郷  
六丁目五番地

印刷者

根

岸高光  
東京市牛込區市ヶ谷加  
賀町一丁目二十三番地

發行所

哲

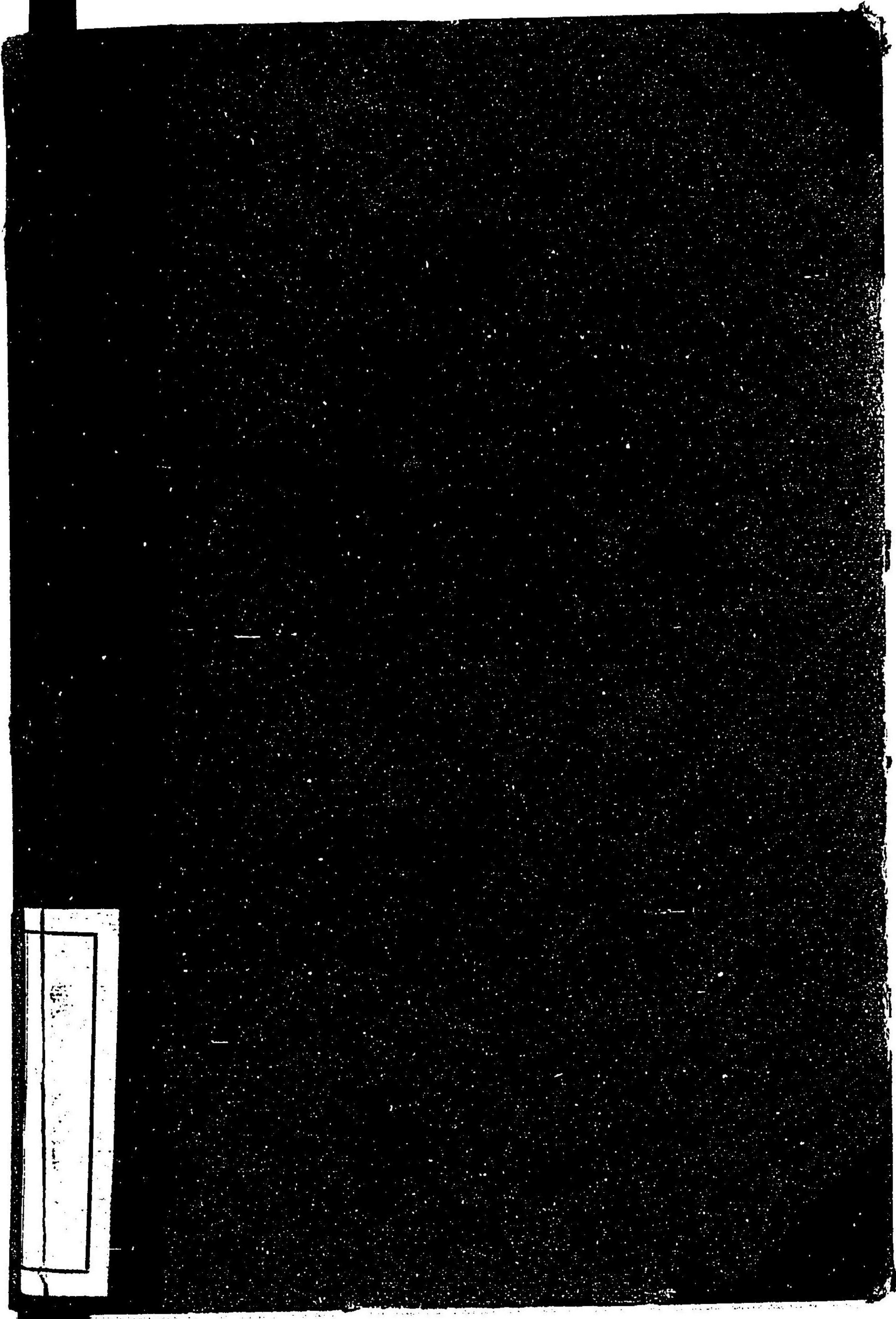
學書院  
東京市本郷區本郷  
六丁目五番地

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目五番地

8. 2. 24

19  
403



100

19  
403

013568-000-7

19-403

教育宗教關係論

井上 円了(甫水) / 著

M26

ABA-0035





